

落ちぶれた浪人が、助けた河童と共に流れ星
を追い、生きる力を取り戻す

流星の侍

作・ほら

「流星の侍」・登場人物

次郎丸（34）：かつては強い侍だったが、今はやる気のない浪人。

子河童（10？）：次郎丸が出会う宇宙人の子供。

父河童（30？）：子河童の父。
先手組たち

中盆
ツボ振り
山賊たち

おりょう（27）：次郎丸の妻。

○次郎丸の家・玄関・夕方

借家住まいのあばら屋。

眠そうに出て行く次郎丸(34)。

妻のおりようが、**持って来た刀を渡す。**

おりよう「次郎丸さん、また刀を忘れてますよ」

次郎丸、刀を受け取りながらぼやく。

次郎丸「落ちぶれた浪人に今更何を切れと言
うのだ」

おりよう「切ろうが切るまいがとにかく稼いで
きてください。このままでは…」

次郎丸「わかっておる、おりよう。この次郎
丸、今宵こそたんまり勝って帰ってくる」

おりよう「それ、毎晩聞いてますよ」

次郎丸「毎晩そのつもりだ。いつてくる」

おりよう「いつてらっしゃい」

次郎丸、欠伸をしながら歩いて行く。

○江戸の町と空・夕々夜

一筋の流れ星が光る。

タイトル「流星の侍」

○賭場（外観）・夜

明かりのついた賭場。にぎやかな声が漏れている。

○同・内

大勢の男が丁半で盛り上がる。

次郎丸「これ全部、丁！」

おちよこ片手に泥酔した次郎丸、手元の
コマを全額丁へ。

会場「うおおおおおおお！」

中盆「次郎丸さんよ、悔やんでも知らねえぞ」

次郎丸「ちようどいい。悔み飽きてもう悔や
むものもなかったところだ」

ツボ振りがツボを振る。
出た目は残念ながら半。

会場 「ざまあみろ！！」

次郎丸 「……………（涙目）」

○夜中・橋の上

手すりに座って次郎丸がひとり煙草を
ふかしている。

次郎丸 「悔み飽き、なお悔やまれる我が人
生：腰にささった刀も錆びゆき：」

その時、夜空を切り裂く強烈な光。次
郎丸の頭上を通過し、流れ星が山向こ
うへ尾をひいて落ちていく。

次郎丸、慌てて手すりから飛び降りる。
周囲の家はしんとしたまま。気づいた
のは次郎丸一人のようだ。

次郎丸 「なんだあれは：」

○翌朝・次郎丸の家・玄関

おりよう 「次郎丸さん、また刀を忘れてます
よ」

次郎丸、刀を腰にさし、見送るおりよ
うを振り返る。

次郎丸 「では、いってまいる」

おりよう 「本当に稼いで帰って来るんです
ね、今度こそ」

次郎丸 「言っただろう。あの流れ星が形を
残していれば、とんでもない高値で売れる
かもしれない。そうすれば、我が家は一気に
安泰だ。しかも、あの流れ星はおそらく俺
しか見ていない」

おりよう 「全財産失って、気でもおかしく
なっただんですか」

次郎丸 「主人を信じろ、おりよう。お前を
飢え死にさせるようなことはせん」

おりよう 「とにかく、気をつけてください
ね」

○町外れ、山道の入り口

次郎丸を、馬に乗った先手組が追い抜き、山道へ。

次郎丸「夜明けを待つんではなかったな…」
次郎丸、走りだす。

○山道

次郎丸、走り疲れて立ち止まり、木の陰に座り込む。

次郎丸「ふう…刀がこんなに重いとかな…」
そこへ、茂みの奥からおかしな声がする。

謎の声「お主！ お主！」

次郎丸、刀のツカを握って振り返る。

次郎丸「何者！」

しかし、近くには誰もいない。

謎の声「こつちだ。たすけてくれ」

次郎丸、声のする茂みへ。

○茂みの奥

次郎丸、茂みの中を見回しながら歩き、何かを発見して驚く。

次郎丸「な、何者だ！」

声の主は、金属製の動物用罠にハマった、全身緑色の子供。

一見子供の河童に見える(以下子河童)。
しかし甲羅のようなバツグを背負い、くちばしのようなマスクをつけ、そこからヘンな声が出ているのだ。
足を押さえ、痛がっている。

子河童「おお、侍、私を助ける」

次郎丸「その前に、何者だ、お主。忍びか？妖怪か？」

子河童「助けてくれたら説明してやる」

次郎丸「な、なんだその態度は。ならば、よい。俺は急いでいるからな」

子河童「どこにだ？流れ星の落ちた場所に

か？」
次郎丸「なぜそれを：貴様、何か知っているのか」
子河童「助けてくれたら教えてやる」
次郎丸「ぬう：態度が気に食わんが、仕方ない」

× × ×
畏を解かれた子河童。アルミホイルのような不思議な報隊で、ケガを治療している。

子河童「助かった。侍、よくやった」

次郎丸「さあ教えろ。あの流れ星のこと、ついでに貴様が何者か」

子河童「ついて来い」
包帯を巻き終わると、スタスタと走りだす子河童。

次郎丸「生意気な：おい待て」

次郎丸、子河童を追いかける。

○もとの山道に戻って

ぴよんぴよん跳ねながら進む子河童と、小走りで追いかける次郎丸。

子河童「私のはあの流れ星で、今宵帰らねばならない」

次郎丸「はっはっは。帰る？ あれは空をゆく光る船だとも言うのか」

子河童「するどいな。その通りだ」

次郎丸「そんなものあるわけなからう」

子河童「ではお主、私のような者を見たことはあったか」

次郎丸「あるわけなからう」

子河童「本当は話してはならぬのだが、お主は私を助けたので、特別に話す。私は違う星から来た。そして今宵、あの船で帰るのだ」

次郎丸「ちがうほしだと？」

子河童「いいか、空に輝くあの星は、ひとつひとつ：」

次郎丸「結構。お主の目的はどうでもよい。

俺が知りたいのはそのお主の船に、金になるものがあるのかどうかだけだ」

子河童「金になるかどうかはわからぬが、お主らの世にないものしかないと思うぞ…」

次郎丸「ふむ。まあよい。貴様を助けた礼に、何か譲れ」

子河童「ならぬ。技術を与えてはならん規則だ」

突然、2人の行く手に山賊が3人現れる。

山賊1「この先は立ち入り禁止だあ！」

山賊2「おい、何だそのへんな奴は？」

次郎丸「なんでもよからう。急いでいる。道を開ける」

山賊3「うるせえ。その変な生き物をよこせ」

次郎丸、子河童の方を見て言う。

次郎丸「ああ申しておるが…どうする？」

子河童、しぶしぶ答える。

子河童「…わかった。お主が私を無事に船に送り届れば、何か金になりそうなものを譲る」

次郎丸「良い選択だ。(山賊に向かって)断る。

通してもらおうぞ」

山賊「この野郎…」

山賊たち、次郎丸と子河童に襲いかかる。

次郎丸、刀を抜こうとする。

が、抜けない。

次郎丸「なんでだ!？」

子河童「なにをしている!？」

次郎丸「錆びついてんのか!？」

次郎丸、山賊の刀の一振りをも、自分の刀の鞘で受け止め、子河童に言う。

次郎丸「走れ!」

子河童「頼りにならん侍だ!」

子河童、走りだす。山賊2人、追う。

次郎丸、刀で襲いかかってきた山賊を

鞘ごとぶちのめし、

残り2人の山賊を追う。

次郎丸、刀を抜こうとするが、まだ抜けない。

仕方なく、また鞘ごと刀を振り回し、山賊2人をぶちのめす。

それに気がついた子河童、立ち止まる。

子河童「お主が強いのか相手が弱いのかかわからぬな」

二人、目的地へ歩き出す。

次郎丸「助けたことには変わりないだろう。

男の約束、忘れるでないぞ」

子河童「仕方がない：しかしなんだあの野蛮な侍は？」

次郎丸「ひとり見覚えのある顔があった。元は侍のはずだが、主を失い山賊に落ちたのだろう」

子河童「主がいないとああも野蛮になってしまったのか」

次郎丸「戦なき世に、侍の居場所はなかなかないのだ」

子河童「戦がないのは良いことではないのか？」

次郎丸「そうかもしれない。だが戦うことしか知らぬ我々が、これからどう生きてゆけばよいのか、皆目見当もつかぬ」

子河童「違う生き方もあるだろう。私の父も、昔は戦士だった」

次郎丸「ほう。お主の国にも侍がおるのか」

子河童「似たようなものだ。だが私が生まれてから、いわゆる職人になった。船に乗って違う星に行き、戦士のときは違う生き方をしている。私はその手伝いでこの星に来たのだ。お主が見た流れ星は、父が私を迎えに来た船だ」

次郎丸「なるほど：お主の父上に会えたら、少しばかり相談でもしてみるかな」

子河童「ならば急ぐぞ。船が先のような野蛮なやつらに見つかったら大変だ」

走って行く2人。奥の空、陽が落ち始めている。

○山奥・船が着陸している場所・夜

池のほとりに、10メートル大の巨大
たまご型宇宙船が傾いて着陸している。
宇宙船は鎖で近くの木につながれてい
る。

霧が出て来た。

先手組が数人、うろろうして宇宙船を
調べている。

子河童と同じような姿をした父河童が、
先手組にとらわれ、

手に縄をつながれている。

茂みの影からそれを見ている次郎丸と

子河童。

子河童は怒りに震えている。

子河童「あいつらめ：父になんてことを。許
さん」

次郎丸「あいつらは山賊先手組。：さすがに
俺ひとりではどうにもできん」

子河童「ならばどうする。このままでは：」

次郎丸「父上は元戦士ではないのか。なぜ戦
わない」

子河童「違う星で争いを起こせば、重罪に問
われる」

次郎丸「仕方がない：。俺が先手組をひきつ
ける。お主は船に乗り、出航に取り掛かれ」

子河童「父はどうするのだ」

次郎丸「なんとかしてみる」

子河童「たよりないな：しかし今はお主しか
頼れん」

次郎丸「お主はいつもひとこと余計だ」

子河童、腕につけていた通信機を次郎
丸に渡す。

子河童「約束の品だ。これでは船からは何も
取れぬからな」

次郎丸「なんだこれは」

子河童「通信機だ。壊れて通信はできないが、

時刻だけはわかる」

次郎丸「果たして金になるか：」

子河童「研究して、商売にすればいいだろう。

とにかく、早く父を」

次郎丸「おお。とにかく、受け取った。約束は果たそう。お主を無事船に返す」

次郎丸、茂みから出てくる。

背後へ走る子河童。

次郎丸「ご苦労でござるなあ、こんな夜に、こんな山奥で」

先手組「なんだ貴様は」

次郎丸「失礼、拙者、通りがかりの名も無き侍、いや、浪人でござる」

先手組「何の要だ。邪魔だ、去れ」

次郎丸「その緑色の異人、我が友人でありまして」

先手組「はっはっは。この妖怪が友人とはふざけたことをぬかしおる」

次郎丸「我が異国の友人に無礼な扱い、ただちにおやめいただきたく…」

先手組「おい。調子に乗るなよ。たたっ斬るぞ！」

先手組たちに囲まれる次郎丸。次郎丸、刀に手をかける。

次郎丸「たたっ斬るならこちらも得意でしてね…」

ちらりと宇宙船を見る次郎丸。

子河童は侵入に成功。

先手組たちが刀を抜く。にらみ合い。

先手組「落ちぶれた浪人が何を言うか」

次郎丸「落ちぶれた浪人は何をするかわからぬものです…」

そのとき、宇宙船が起動して、エンジン音を発し、煙を吹き出しながら浮き始める。

次郎丸、ついに刀を抜き、父河童に向かって叫ぶ。

次郎丸「お父上、今だ！」
父河童、暴れだし、手の縄を引きちぎる。

宇宙船は鎖が邪魔をして、浮かびきれず乱れた動きを繰り返す。

先手組たちは父河童に襲いかかろう

う心配で心配で：」

次郎丸「なんともござらん。すぐ金にはならんが、土産はあるぞ」

次郎丸、懐から、子河童からもらった通信機を取り出す。

おりよう「なんですか、これは」

次郎丸「なにかにするのだ、これから」

おりよう「もう、なんでもいいです。おかけりなさい、次郎丸さん」

次郎丸「おう。次郎丸、ただいま帰った」

次郎丸、スッキリした笑顔。

終